

特集

——シンポジウム2「ヴィクトリア朝イギリスの家族——周縁的家族とく親子離隔——」

母親の移民後に

——西インド諸島の「残された子どもたち」と家族再結合をめぐって——

奥田 伸子 (名古屋市立大学)

1. ウィンドラッシュ・ジェネレーション

2022年6月22日、ロンドン・ウォータールー駅で「ナショナル・ウィン
ドラッシュ・モニュメント」¹の除幕式が、当時のケンブリッジ公夫妻の出
席のもと行われた。1948年のこの日、ティベリー・ドックに接岸したエン
パイア・ウィンドラッシュ号から539名のジャマイカ出身者をはじめとする
約800名の西インド諸島出身者²が上陸した。この入港は戦後における
新英連邦からの移民の幕開けを象徴している。この時から1971年移民法³
までの約25年間にイギリスに移民した西インド諸島出身者はウィンドラッ
シュ・ジェネレーションと呼ばれている。

22年6月に除幕されたウィンドラッシュ・モニュメントは、ジャマイカ
出身で現在アトランタに在住している彫刻家バジル・ワトソン(1958-)
による作品である。モニュメントは若い男女が手を固くつなぎ、子どもは
女性のスカートにつかまるといふ家族を強く想起させる群像であり、ワト
ソンは家族の像であると説明している⁴。しかし、実際の移民はこのモニユ
メントのように家族そろって到着したのではなかった。しばしば父と母は
別々に、また母は西インド諸島に子どもを残して移民し、子どもは後から
呼び寄せられた⁵。本稿は母の移民後に残された子どもの自叙伝や回想から、
親と子の別れと再会の語り、およびそこに流れる感情を考察する。なお、
ウィンドラッシュ世代への関心の高まりとともに、彼／彼女らのイギリス
到着前後のパーソナル・ナラティヴは「アライヴァル・ストーリー」と呼ばれ、
各地で収集が進んでいる。

2. 資料紹介

本稿では、「残された子ども」であった2人の女性の自叙伝と日本人研究者に語ったライフ・ヒストリーを中心に、先行研究に利用された語りを利用する。

1人目はフローエラ・ベンジャミン(バロネス・フローエラ・ベンジャンミン・オヴ・ベックナム Baroness Floella Benjamin of Beckenham)である⁶。フローエラは6人きょうだいの2番目として1949年にトリニダードに生まれた。父はアンティグア出身で、トリニダードに移民した後、巡査として働きながら石油精製所における労働組合活動に従事し、その一方セミプロとしてジャズを演奏した。イングランドに移民した理由はジャズ演奏のためであった。父は1950年代の終わりに単身渡英し、母はその後、年少の2人の子どもを連れて父の後を追った。フローエラはその約1年半後1960年10歳で渡英し、ロンドン南部で成長した。16歳からバークレー銀行で働き、その後ミュージカル女優となった。舞台に出るかたわらBBCの子ども番組に主演し、1987年に自身のテレビ番組制作会社を立ち上げた。子どもや若者への支援活動を活発に行い、子ども政策のための閣僚ポスト設立のために運動を行った⁷。テレビ業界への貢献により、2001年にOBE (Officer of the Order of the British Empire)を受勲し、2010年には貴族院議員(自由民主党所属)となった。2022年11月にはメリット勲章を授与され、2023年5月のチャールズ3世の戴冠式では王笏を持って入場するなど、ウィンドラッシュ世代顕彰の動きにおいて「ブラック」の代表者として活躍している。彼女は1995年に児童書としてトリニダードでの幼少期から渡英しイギリスでの生活を始めるまでを*Coming to England*、1998年にティーンエイジャー時代を*The Arms of Britannia*と題して出版した⁸。

もう一人は1961年にジャマイカで生まれたドロシー・フランシスである。両親は乳児だった彼女を残してイギリスに移民する。ドロシーは1966年5歳で渡英しコヴェントリーで育った。義務教育終了後、郵便局などで働きながら、夜学でA-levelを取得し、ポリテクニクと大学で英文学、ついでコミュニティ・ワークにかかわる学位を取得し、コミュニティ・ビジネスを始めた。ビジネスおよびコミュニティへの貢献により多くの受賞歴があり、2017年にMBE (Member of the Order of the British Empire)を受勲し、

2018年にはレスター大学から名誉博士号を授与された。ドロシーのライフ・ヒストリーは明治大学の多宗教・多文化の歴史研究所 (Research Centre for the History of Religious and Cultural Diversity, Meiji University) の佐藤清隆が2010年から2017年までの間に9回にわたって行ったインタビューの再構成⁹である。

自叙伝やオーラル・ヒストリーなどのパーソナル・ナラティヴの利用は近年非常に盛んであるが、歴史研究に資する点とともに留意すべき点もある。ペニー・サマーフィールドは歴史研究における日記、手紙、自叙伝、オーラル・ヒストリーなどのパーソナル・ナラティヴのそれぞれの形式の特徴を考察した¹⁰。自叙伝もオーラル・ヒストリーもともに執筆あるいはインタビュー時点において過去を回想した結果であり、本稿で利用するナラティヴはその生成時に自身の子どもの時代を再構成している。フローエラもドロシーもナラティヴ生成時には、イギリス社会の中で一定の地位を得ていた。自叙伝を執筆した時点でフローエラはイギリス社会の中で子ども番組のプロデューサーとして地位を築いていた。ドロシーの場合もビジネス界で成功した後にインタビューを受けている。出版を前提とした自叙伝執筆にはおいては読者の存在が念頭におかれるが、フローエラの自叙伝は児童向けに書かれた (*Coming to England* は10歳以前の子ども、*The Arms of Britannia* は10代前半を念頭に書かれていると思われる)。子ども向けの番組のプロデューサーとして、イギリス社会において支配的な親子観と大きく異なることは書きにくかったと考えられる。オーラル・ヒストリーの場合、インタビューアとの関係性はしばしば指摘されているが、ドロシーの場合、日本人—すなわち、イギリス社会にとっての他者—がインタビューしている。この点を強く認識したためと思われるが、インタビューにおいてドロシーは背景説明を綿密に行っている。再構成において佐藤は自身の質問を再録していないので、あるナラティヴがどのような状況でどのような質問の答えであったか不明である。さらに、イギリス社会は2人が親子離隔を経験した時とは大きく異なっている。1960年代イギリスは人種差別が色濃く残る社会であったが、1990年代あるいはそれ以降のイギリスは、差別は残るものの多民族社会であることは共通認識となり、2人はともにマイノリティ側からのダイヴァーシティ推進役としてイギリス社会の中

で活動していた。彼女たちの親子離隔と再会の語りを利用するにあたってこの点を念頭に置く必要がある。

これら2点の「残された子ども」によるパーソナル・ナラティブに加えて、オーラルヒストリアン、メアリ・チェンバレンによる西インド諸島出身者へのインタビューを中心とした家族の研究¹¹、母親のイギリス移民による親子離隔を原因とする精神疾患を含む心理的影響について調査を行った心理カウンセラー、イレヌ・アーノルドの研究を利用する。

3. 1950年代、60年代の前半のイギリスにおける家族と女性労働

では、フローエラやドロシーが到着した時のイギリスはどのような状況であったのだろうか。イギリス女性にとって1960年代末は一大転換点であった。「寛容の時代」と呼ばれ、性や家族、女性に関わる立法が相次ぎ、第2波フェミニズム運動が盛んになった¹²。しかし1950、60年代前半はフェミニズムの退潮期であり、女性が家庭に入った時期とされてきた。近年、1940年代後半から60年代前半を「長い1950年代」として、女性は従来考えられていたほどに家庭中心の生活を送っていたのではないという議論¹³が出てきているが、この議論は家庭重視の時代であったことを否定しているわけではない。

第2次世界大戦後、男女とも生涯未婚率は下がり¹⁴、女性の平均初婚年齢は1931年の25.4歳から51年には24.4歳、71年には22.6歳と下がった¹⁵。50年代後半、マクミラン首相は「こんなによかった時代はなかった」と自画自賛したが。1950年代初めから60年代初め頃までイギリス経済は比較的順調であった。失業率はこの時期1.2%から2.6%の間を推移した。肉体労働者の平均週あたり収入は1950年から65年の間に約2.6倍になる一方、生計費の上昇は約1.8倍¹⁶であるので、平均的に見れば労働者は豊かになった¹⁷。1951年の既婚女性の労働力率は21.7%、71年には42.0%と増加した¹⁸が、その多くはパートタイム就労であった。この時期はより多くの人の方がより早く結婚し、夫の職は安泰で収入も増加する一方、既婚女性は専業主婦あるいはパート労働を行う主婦としてその時間の多くを家庭で家事、育児にあてていた。

戦後は子どもの「福祉」への関心が高まった時期でもある。戦時中の子

どもの疎開経験は親子離隔がもたらす問題の認識¹⁹へとつながり、アンナ・フロイト、ジョン・ボウルビイ等児童精神分析の専門家がその研究成果を発信した。特に、ボウルビイの『母性的配慮と精神衛生』(1951)は乳幼児期の母親による育児の重要性を強調し、その通俗的理解として、義務教育開始ごろまでは母親が育児をするべきという、いわば「5歳児神話」が広まった。「家庭の外で稼ぐ夫と主婦として家庭を守る妻、両親に慈しまれる子どもという近代家族モデル」はヴィクトリア朝において神聖視された家族像であるかもしれないが、大多数の労働者階級男女がそのような家族に手が届くようになったのは第2次世界大戦後であった。しかし、後に見るように西インド諸島で展開したのはこれとは異なった家族である。それゆえ、本稿では1950、60年代イギリスのヴィクトリアン・ファミリー的な家族のあり方を家族の「本国モデル」²⁰と呼ぼう。

その一方、この時期は女性労働者の需要が高まった時期でもあった。終戦直後のドル不足のため繊維産業は輸出産業として重要視された。戦争中から不足が指摘されていた看護師や病院、施設や個人宅の家事労働者の不足も深刻であった。既婚女性のパートタイム労働は拡大したが、家事労働、繊維産業などは労働力が十分に得られなかった。男性労働力も不足し、特に炭鉱、交通などの労働力不足は深刻だった。1950年代半ば以降ロンドン交通局、ブリテッシュ・レイル、NHSは西インド諸島にリクルート・オフィスを設置し男女労働者の採用にあたり²¹、移民希望者には植民地政府が渡航費の貸し付けをおこなった。イギリスに移民した西インド諸島出身は男女を問わず労働者と位置づけられた。戦後イギリスにおける「ホーム」—「ホーム」は家庭と「本国」双方の意味を含んでいる—のイメージ構築における移民女性の位置づけを検討したウェンディ・ウェブスターが示唆するように、西インド諸島からの女性移民は既婚者であっても、家族の「本国モデル」が想定するような「母、妻」ではなかった²²。

4. 西インド諸島の家族

次に、20世紀中葉の西インド諸島における家族を概観しよう。本論では1979年から81年にかけて西インド諸島大学社会経済研究センター(Institute of Social and Economic Research, University of the West Indies)

によって行われた「カリブ地域における女性研究プロジェクト」(Women in the Caribbean Project 以下、WICP)の調査を参照する。WICPの調査は西インド諸島の英語圏内においても、歴史とそれに伴うエスニック構成、階級によって、家族のあり方が一様ではないことを指摘しているが、全体として見た場合、イギリスとは異なった特徴がある。ここで子どもの養育について紹介する²³。

WICPは西インド諸島地域における婚姻を「通い(visiting)」「内縁関係(common-law)」「結婚(married)」の3種類に分類している。1960年代ごろ、西インド諸島社会においても家事と育児に専念する専業主婦が理想とされたものの、多くの女性にとってそれは叶わぬ理想であった。この地域の約半数の世帯は女性が世帯主であり、多くの女性は自身が「稼ぎ手」として収入を得る必要があった。結婚は出産に先立つものではなかったので、「結婚」以外の関係の中で生まれる子どもを非嫡出子とするならば、その割合はジャマイカで70 - 75%、その他の島々で40 - 60%とされている²⁴。両親と子どもという核家族に生まれる子どもは全体の4分1程度であった²⁵。父親が異なるきょうだいは珍しくなかった。高い失業率を背景に男女ともに国内の他地域、西インド諸島域内、合衆国やイギリスに移民することは以前から行われている。それにとまって子どもの養育を親以外の誰か——祖母が多いがそれ以外の場合もある——に託すこと、チャイルド・シフティング(child shifting)は一般的に行われていた²⁶。

チャイルド・シフティングの具体例をみよう。以下、特に断らない限り続柄は子どもから見た関係である。両親の移民後、ドロシーは母方の祖父母に育てられた。祖父母の家にはドロシー以外にも母方のいとこ2名、姪の計6名が住んでいた。姪とはドロシーの16歳年長である父親違いの姉の娘であり、ドロシーの1歳年少であった。時には血縁者以外に子どもを託すこともあった。チャンパレンが紹介するクラウディーン(仮名)は1956年にジャマイカに生まれた。母は子どもたちを祖母ベスに託し1960年に渡英した。ベスの世帯はクラウディーンとそのきょうだい2人、両親が移民した9名のベスの甥と姪に加えて血縁関係にない子どもがいることもあった。例えば、クリフトンという少年は血縁ではないが、ベスが数年間育てた。クリフトンはベスの不在時にはクウラディーンら幼い子どもを

監督し留守番役を果たしていた。ベスはこうした子どもたちを育てるために、農場を経営し、市場で農産物を売った。クラウディーンは祖母のこの勤勉さのおかげで満ち足りた子ども時代を送ったと回想する。ただし、子どもたちもさまざまな家事を分担していた。彼女は「朝寝坊はできません。常になにかしらの仕事があるのです。朝早くからしなければならぬ家事が」と回想する²⁷。核家族以外のさまざまな成員を含む家族をチェンバレンは「拡がった家族 (extended family)」とよんでいる。家族社会学でいう拡大家族と異なり婚姻カップルを全く含まない場合もあるので、本稿では「拡がった家族」と呼ぶ。

ドロシーは祖母に溺愛されたと述べ、クラウディーンは厳しいが愛情溢れる人、働き者で強い女性として祖母を回想している。託された多くの子どもを育て上げたベスに対して、子どもたちは成長後、経済的、精神的支援を惜しまなかった。育てた甥の1人の息子が高齢となったベスと同居しているし、イギリスにいるクラウディーンも当然のこととして経済的援助を行っている。

彼女はいつも幸せです。…時々、彼女には育て上げた誰かから手紙が来ます。そして、…もし、彼らがジャマイカにいたのであれば、車を運転して顔を見に行き、ちょっとしたものを手渡し、1日話し相手になったり、とそんなことをします。彼女は、今、欲しいものなんでもは手にすることができます。…例えば、高価だとか、金が足りないとかならば、彼女はわたし姉妹に連絡します。「これがしたい、あれがしたい、助けてくれるか」と。…そして私たちはいつだって支援します²⁸。

メアリ・チェンバレンはこうした子育てのあり方について「19、20世紀移民の動き——女性も男性と同様に移動するのであるが——その動き以前からあったもので、移民の結果というより移民を可能にしている要因」と指摘し、親以外が子育てに関与することの経済的必要性のみに着目することは、ある子どもに関係する全ての人々が子育てに関与したいという人間的、文化的反応を見落とすことになる、と指摘している²⁹。とはいえ、チャ

イルド・シフティングに負の側面がなかったわけではない。次節で見るフローエラとそのきょうだいを託された人々は、彼女たちを使用人扱いた。ドロシーなどの例に見るように育ての親との関係が良ければ、再会後の実の親との関係は困難なものになり得た。では、子ども時代に親子離隔を経験した人々の親子離隔の経験と渡英と親子再会はいかに語られたのであろうか。

5. 2つの親子離隔と再会の物語

フローエラが*Coming to England*に記した子ども時代の思い出は、バルバドスでの幸せな生活の物語であるが、家族は両親ときょうだいのみである。このことがフローエラの親子離隔と再会の物語を「家族の本国モデル」が想定するものと親和的なものとした。

フローエラの父が単身渡英した時には子どもたちと別れることはできないと泣いた母は、やがて、親族や友人に子どもを託すことができないかを尋ねて回るようになった。祖父母はすでに故人、あるいは国外在住のため「養父母」探しは難航したが、最終的には2組の名付け親が引き受けることになった。6人の子どものうち4名は一時的にトリニダードに残された。養父母はフローエラと姉を召使のように扱い、フローエラは「私の人生の中で最も暗い日々となる15ヶ月となった」³⁰と回想する。それゆえ、母からの呼び寄せは長く待ち望んでいたものであった。子どもたちだけの2週間の船旅はスリルに満ちた冒険として描かれ、サウザンプトン港での再会の喜びは*Coming to England*のクライマックスである。

タラップを降りるとき、今度は不安ではなく喜びで私の心臓の鼓動は雷のように大きく聞こえました。私は母にむかって走り寄り、私たち全員、母に走り寄り、とびつき、抱きしめました。母も私たちを壊れてしまうのではないかと思うほどにきつく抱きしめました³¹。

さらに母の子どもたちへの気遣いも描かれた。

[母親に抱きついた子どもたちが：補足 引用者] ようやく、母から

離れると、母はバッグを開けてひとりひとりにプレゼントを渡しました。「ちょっと寒いかもしれないと思ったのよ。だからこれを持ってきたの」と言っただけ。母は私にマークス・アンド・スペンサーのニット・カーディガンをくれました。淡いブルーでピンクとイエローの花の刺繍、とても素敵でうっとりしました。イギリスでの最初のプレゼント。大喜びでカーディガンを抱きしめました。まるで魔法の粉が降り注ぎ、私の全ての夢が叶ったようでした³²。

フローエラの親子離隔と再会の物語は、別れの辛さと再会の喜びを親子双方が経験し、親子の愛情の強さを強調する「家族の本国モデル」に沿った物語である。フローエラの家族は西インド諸島では少数派に属する核家族であり、両親の関係も安定的である。夫婦、親子が強い愛情で結びついていたこと、養父母にフローエラたちに対する愛情がなかったこと、母が渡英する時に子どもたちが一定の年齢に達していたこと、そして離隔の期間が短かったという要因によって「家族の本国モデル」に沿った物語となったと考えられる。しかし西インド諸島の「広がった家族」の中で子ども時代を送った場合、異なった親子離隔と再会の物語があった。

ジャマイカで祖母に溺愛されていたドロシーにとって、イギリスでの実の両親との再結合は、慣れ親しんだジャマイカの生活との別れを意味し、「初めて会う他人」でしかない両親やきょうだいと見知らぬ環境の中で生活を始めることであった。ドロシーの再会の物語はジャマイカを離れることへの恐怖から始まる。

ジャマイカを離れたくはなかったのです。私は今でも慣れ親しんものの全てから引き離されて渡英した時の恐怖を思い出すことができます。ジャマイカでは牧歌的な生活を送り、甘やかされ、愛され、スポイルされていました。私は特に大事にされ愛されていたのです³³。

イギリスで再会した両親はドロシーにとって「他人」でしかなかった。父については「私が生後数ヶ月の時に移民したので、私は父がどのような人か全くわからなかった。だから、実際のところジャマイカ出身の男性なら誰

でも私を連れていくことができたと思う」³⁴と述べている。再会の喜びで泣いている母親との対面は双方にとって最悪のものであった。

到着後、父は私を見知らぬ寒々とした家に連れて行き、一人の女性を私の母だと紹介しました。私は、ただただ彼女を見つめていました。彼女は他人だったからです。母は喜びで泣いていました。母は何年も私に会っていなかったからです。母は私が駆け寄って抱きしめ、キスすることを期待したのだと思いますが、私はしませんでした。私は彼女を知らないからです。非常に悲しく混乱した再会でしたし、私は悲惨なほど不幸で、慰めようがないほど泣いていました³⁵。

両親は、渡英後3人の子どもを授かっていたので、ドロシーはイギリスに来てはじめて自分が四人きょうだいの長姉になったことを知った。家族の中で居場所がないと感じたドロシーは精神的に混乱し、弟妹をいじめた。

両親が見知らぬ人であるのはドロシーに限ったことではなかった。フローエラはモダンスクール時代のエピソードとしてジャマイカ出身の同窓生について次のように語っている。

彼女は学校に少数いた西インド諸島出身でした。彼女も私と同様に両親によってカリブ海地域に4歳の時に残されました。しかし、私たちの間の相違は、彼女は両親と10年別れていたことです。彼女にとって悲しくトラウマとなったのですが、彼女がイギリスに来て一緒に暮らし始めた時に[母親は：補足 引用者]まるで他人でした。その時までには別の誰かと結婚しており、その人との間に子どもがいました。彼女は父親違いの弟や妹とやっていかなければならなかったのです³⁶。

ドロシーなどと同様に幼い時に母がイギリス移民し、何年か後に家族再結合した女性20人にインタビュー調査を行った心理カウンセラー、イレース・アーノルドは、論文において調査対象の75%は再会時に母親を認識することができず、母親も同様の状況だったことを指摘する。ドロシーと同

様の記憶を持った女性もいる。「母が私を抱いた記憶はありません。空港から家まで車の中ではずっと無言で、私はずっと泣き通していましたが、誰も何も言いませんでした」³⁷とその女性は回想する。

友人の経験からフローエラは、移民に伴う親子離隔に非常に批判的である。

数えきれない程の両親が行ったイギリスに来るという決断は後に残される子どもにとっては寝耳に水の出来事でした。この破壊的で人生を一転させてしまう災厄に関して子どもたちは何も意見を言うことができないのです。ただ受け入れるしかないのです。…私の友人は両親にあまりにも長く残され、感情的に大きな損害を受けた多くのカリブ地域出身の人々の1人です。そして多くの人々は、声を上げることなく苦しみ、傷ついた心の奥に隠し持っている苦痛について決して話さないのです³⁸

フローエラは両親に取り残されることすなわち親子離隔に焦点を当てているが、ドロシーの苦痛の原因は親子離隔そのものよりは、慣れ親しんだジャマイカや溺愛してくれた祖母との別れや「他人」となった両親や初めて会ったきょうだいとの家族再構築の苦しみであるように思われる。慣れない風景と気候、差別的で敵対的な社会の中で「見知らぬ人」と共同生活を始めるのが西インド諸島に残された多くの子どもの渡英後の現実であった。

6. 母の感情

「家族の本国モデル」に沿った親子離隔と再会の物語においては、移民した親は当然再会を待ち望んでいる。一方、ドロシーの母はどうであろうか。成人後のドロシーは、前節で見た再会時の自身の感情は子ども側からの見方だということを認め、ナラティブの中で母の言葉を引用し、母の感情を語った。

あなた[ドロシー：補足 引用者]から離れていることで毎日泣いて、

ひざまずいてあなたのために祈ったの。毎晩泣き寝入りして、あなたがとても恋しくて、それは辛かった。あなたをここに呼び寄せるために小銭に至るまで貯蓄して…あなたがイギリスに来る日を数えていた。そしてあなたが来たのに帰りたいと際限なく泣いていた。始終涙を流しているあなたを見るのが、どんなに私を傷つけ不幸にしたか、わからないでしょう。あなたと遠く離れているから泣いて、今度はとても不幸なあなたを見る苦痛でまた泣いて…³⁹

実際、母は祖母に手紙を送り、再びドロシーを託すことが可能か問い合わせた。祖母は二つ返事で了承したので、母は再び貯蓄を始めた。

実際に送り返された例もある。1952年にバルバドスで生まれ、1968年にイギリスに移民したサミュエルと母との再会後の関係はさらに複雑だった。サミュエルは渡英後に学習障害がわかり、4年間特別支援学校に送られた後バルバドスに送り返された。母はサミュエルについて「彼は…反抗的でした。理由は分かりません。子どもたちの頭の中で何が起きているかなんて、他の人に分かりますか。」⁴⁰と述べている。一方、サミュエルはインタビュアーであるチェンバレンに、「本当の話を聞かせよう」とやや挑発的に話を始めている。

ぼくは、バルバドスに戻る飛行機にのせられた。…他の弟や妹みたいに機会は得られなかったんだ。ぼくが持っていて、弟や妹が欲しいものは、みんなぼくから取り上げられて彼らに与えられたんだ。息子を愛している母が、どうしてこんなことできるんだ⁴¹。

サミュエルは母親を愛していると言いながら、母親に対する恨みが明確に言語化されている。チェンバレンはサミュエルの母の語りや愛と包摂に溢れている一方、サミュエルの語りは不在と欠落に満ちていると指摘する。

アーノルドのインタビュー対象者の多くも母親と親密な関係を築くことはできなかった。インタビューを受けた女性たちは、母が自分たちを呼び寄せたのは親子の愛情や一緒に生活したいという感情に基づいているとは

考えていない。調査対象20人中16人が呼び寄せの理由として「弟妹の育児の補助」をあげた⁴²。子どもが年少者を世話するのは西インド諸島社会でよく見られることであるが、それを呼び寄せの理由と考えるのは、親子が互いに「見知らぬ人」であり、愛情に基づいた関係ではなかったことので証左である。

ドロシーは結局ジャマイカに帰ることはなかった。母は新たに生まれた妹の世話をドロシーに託すことで居場所を与えた。イギリスに定住したもの彼女が両親と「愛情あふれる家庭」を築いたわけではなかった。ドロシーの両親に対する評価は必ずしも好意的なものではない。父親は「残酷で、よそよそしく、肉体的にも精神的にも虐待を行い、あからさまにどの子どもも嫌っていた」と手厳しい⁴³。母は「私たちを非常に愛してくれていたが、言うことがよく矛盾し、時には一緒に生活するのが難しい」⁴⁴し、子育てにおいて「厳格なしつけを行った」⁴⁵と批判的である。例えば、母はドロシーにジャマイカ・パトワ(クレオール語)を話すことを禁止し、話すと強く叩かれることもあったことを記憶している。そのためドロシーは話すことに恐怖を感じるようになったと回想する⁴⁶。

ドロシーの母が子どもたちのために懸命に働いたことはドロシーの回想から明らかである。ドロシーの父は、コヴェントリーの自動車工場で働き、比較的よい収入を得ていた。しかし、家賃と光熱費を支払い、わずかな生計費を妻に渡すだけであり、ドロシーの母は常に家計の切り盛りに苦勞をしていた。複数の幼い子どもを抱えてチャイルド・マインダー⁴⁷への支払いが経済的に割に合わない一時期を除いて、劇場の食堂、ついで病院の清掃を行った。さらに児童手当に頼り、洋裁で不足分を補った。西インド諸島からの移民女性として可能なことは全て行なって家族を支えた⁴⁸。しかし、成長後のドロシーは両親の家計にたいして経済的支援を行わなかった。クラウドイーンが祖母への経済的援助を惜しまないとは全く異なった態度である。ドロシーはO-level試験終了後すぐに家を出て独立した。独立後、家族との関係は改善したもの、同居することはなかったし、教育を受け社会的階梯を上るための支援を家族に求めることもなかった。ドロシーの母はこれにショックを受け、弟妹たちにより自由を認めたとドロシーは指摘する⁴⁹。一方、フローエラの母は、差別的なイギリス社会で生きる子ど

もたちに「強さ、決意、信念と自信」を教え、6人の子どもをそれぞれ社会的成功に導いた人として描かれている⁵⁰。

7. まとめにかえて

戦後イギリスにおいて、西インド諸島出身の女性は労働力として求められた。移民した女性は子どもを呼び寄せることを夢見て貯蓄した。子どものイギリスへの呼び寄せの理由として、「良い教育を受けさせるため」はよく言及された。一方、西インド諸島に残された子どもにとって愛着の対象は自分を育てる祖母等である。西インド諸島において愛情を持って子どもを育て上げた「育ての親」は、成人した子どもたちから「強い女性」「働き者 (hard-working)」と賛美され、高齢になった時には育てた子どもから経済的、精神的に支援を受けることもあった。こうした家族のあり方は、伝統的に核家族であり、母が養育に責任をもち、成人した子どもは独立した世帯を形成することが原則であったイギリスの家族とは異なっていた。

「残された子ども」の母との再会は必ずしも愛情あふれるものではなかった。幼くして別れた場合や再会までの期間が長い場合など、子どもはもとより親も子どもを認識することができなかった。母がイギリスで父親とは別の男性と結婚をしたり、渡英後弟妹が誕生している場合はさらに困難であった。子どもの呼び寄せを夢見ていた母親にとっても、再会は時には失望の時であった。一方、フローエラのように自身の家庭は安定した核家族であり、祖父母などの親類とは接触が少ない家族もいた。残された時の養育者の態度とも相まって、フローエラのアライヴァル・ストーリーは実の親との待ち望んだ再会であり、子どもたちのイギリス移民後の回想は、差別に抗してイギリス社会の中で地歩を固めていく母と子たちの物語として語られる。

西インド諸島からイギリスへの移民は地理的移動であるとともに異なった家族像が主流となっている社会への移動であった。西インド諸島出身者は、幼少期における親からの分離とともに家族の構造や家族を取り巻くコミュニティのあり方が大きく異なる社会への移動を経験した。イギリスにおけるエスニック・グループごとの統合失調症発症の社会的要因に着目したマレー等の研究は、アフロ・カリビアン系がイギリスで置かれている不

利な状況(高い失業率)などとともに、幼少期の親子離隔が一つの要因であることを示唆している⁵¹。

アラン・コルバン等が監修した『感情の歴史』の第3巻は主に20世紀を扱っており、その中ではトラウマの歴史として移動する人々が経験する感情が分析されている⁵²。そこで扱う移動は難民や暴力的な移動に直面した人々である。このような極限の状態でなくとも、移民に伴って人々は強い感情を抱く。家族再結合時のフローエラとドロシーのほぼ正反対の感情が示唆するように、西インド諸島出身の子どもたちの親子離隔と再会の物語は「家族の本国モデル」とそこから想定される親子の別れの悲しみと再会の喜びのみには回収できない。彼女たちのナラティブは感情史に興味深い材料を提供している。

* 本研究は、科学研究費基盤(B) 課題番号:18H00702による研究成果の一部である。また、2022年9月19日に青山学院大学において開催された世界子ども学研究会第29回研究例会シンポジウム『近現代イギリスにおける〈親子離隔〉』(オンライン開催)および11月19日に早稲田大学において開催された日本ヴィクトリア朝文化研究学会2022年度大会シンポジウム2「〈親子分離〉からみるヴィクトリア朝イギリスの家族」における報告をもとに加筆修正したものである。シンポジウムにおいていただいた貴重なご質問、コメントに感謝する。

註

- 1 2018年、テリーザ・メイ首相はフローエラ・ベンジャミン(「2. 資料紹介」を参照)を委員長として全9名からなるウインドラッシュ・コメモレーション委員会を立ち上げた。委員は全てブラックであり、その多くはウインドラッシュ世代の子どもである。ナショナル・モニュメントのデザイン選定はこの委員会が行なった。2018年はウインドラッシュ号到着70周年であるが、イギリス国内はウインドラッシュ・スキヤンダルで揺れていた。2010年代に入り、移民数の減少を目指す保守党政権は不法滞在移民をターゲットに「敵対的環境政策(hostile environment policy)」をとった。この政策は当該人物がイギリスに合法的に滞在している証拠を確認することを家主、雇用主、NHS、銀行に義務化し、確認できない場合はサービス等の

提供を行わないことを求めた。さらに政府は「不法移民」の勾留、強制送還にも踏み切った。1950、60年代に合法的にイギリスに入学していたにもかかわらずパスポートをなくした等の理由でそれを証明できない人々が職や家を失い、最悪の場合強制退去させられた。これが大きな政治スキャンダルとなり、2018年政府はこの政策の誤りを認め、被害者に補償を行うとともに第三者による調査を行なった。報告書は Wendy Williams, *Windrush Lessons Learned Review, Independent Review*, HC93, 2020。

- 2 本稿における西インド諸島とはカリブ海に加えてガイアナ等中南米にある英語圏諸国を指す。これらの国々の住民のうち、ルーツがアフリカにある人々をアフロ・カリビアンとする。西インド諸島には他にインド、中国からの契約労働者の子孫、アメリカ先住民族、白人、ムラート等が居住している。
- 3 戦後イギリスの移民政策については浜井（2011/2023）特に pp. 259-264 を参照。
- 4 ウィンドラッシュ・モニュメントの制作過程については下記のウェブサイトに詳しい。ワトソンによる作品の解説ビデオも掲載されている。
<https://windrush-monument.leveellingup.gov.uk/the-national-windrush-monument/> (Last accessed on 17th March, 2023)。
- 5 Webster は 1953 年のサンプル調査を引用し、イギリスに移民した西インド諸島出身女性の 63% が母親であり、その 90% 以上が子どもを西インド諸島に残して移民したと述べている。子どもの預け先は祖父母が 95% と圧倒的に多かった (Webster (1998). p. 37)。
- 6 ジャズ演奏家であった父はエラ・フィツイジェラルドを意識してこの名をつけた。(Benjamin (2010), p. 74)。
- 7 現在、教育省のもとに Parliamentary Under Secretary of State (Minister for Children, Families and Wellbeing) が任命されている。
- 8 Benjamin (1995/2016), Benjamin (2010)。
- 9 Sato (2019)。
- 10 Summerfield (2019)。サマーフィールドがこの本で取り上げているパーソナル・ナラティヴは書簡、日記、自叙伝・回想録、オーラル・ヒストリーである。なお、サマーフィールドは過去に生きた人の個人の言葉と視点を示すさまざまな歴史資料の呼び方比較検討し、「自己についての物語 (story) 構築における創造的、解釈的過程が作用していることを示している」(p. 6) としているとしてパーソナル・ナラティヴという述語を選んだと述べている。
- 11 Chamberlain (2009)。
- 12 60年代末の女性、性にかかわる法律として、1967年：性犯罪法（男性間の

- 同性愛を脱犯罪化)、国民健康保険(家族計画)法(避妊薬を既婚、未婚を問わず無料で提供)、中絶法(妊娠28週間までの中絶を合法化)、1969年:改正離婚法(「修復不可能」を離婚理由に)国民代表法および改正家族法(成人年齢を18歳に)、1970年:同一賃金法(性別による賃金格差を違法化、完全実施は1975年)婚姻訴訟法並びに婚姻財産法(主婦の非金銭的貢献の認定)がある。
- 13 Tinker, Spencer and Langhamer (2018).
 - 14 生涯未婚率を45 - 49歳までに結婚したことがない人の割合とすると、1951年には1000分の151であったが1971年には1000分の78となった(Coleman and Salt (1992), p. 179 から算出)。
 - 15 Lewis (2001), p. 71.
 - 16 マニュアル労働者の名目週あたり賃金は1930年を100とした指数で、1950年262.0、1965年674.7である。一方、生計費(cost of living)は1930年を100として1950年180.5、1965年320である。賃金や生計費に関する長期統計はPrice and Bain (1988), p. 179を参照した。
 - 17 とはいえ、「豊かさの中の貧困」を問題視する同時代の社会調査も存在する。貧困問題と絡めた1950年代初頭における労働者階級の消費については眞嶋(2009)を参照。
 - 18 Price and Bain (1988), p. 172.
 - 19 戦争中における疎開経験と児童心理学の発展については板倉孝枝による一連の研究がある。ボウルビイの愛着理論の生成については中野(2017)を参照。
 - 20 本稿で「本国」はmetropoleを指し、家族観なども含めた価値観を植民地に拡散する権力の中心地としての意味を込めている。
 - 21 看護師のリクルートについては、Snow and Jones (2001)を参照。ロンドン交通局についてはロンドン交通博物館が多くの写真とともに紹介している(<https://www.ltmuseum.co.uk/collections/stories/people/london-transport-caribbean-recruitment> last accessed 25th April 2023)。
 - 22 Webster (1998), pp. 25-44, passim.
 - 23 シニアによれば、WICPは英語圏西インド諸島の女性に焦点を当てた最初の調査である。調査は3カ国の1600人への半構造化インタビュー、38人のライフストーリーの収集とともに、特定のテーマについての詳細なインタビュー調査からなっている。Senior (1991), p.1。
 - 24 Senior (1991), p. 82.
 - 25 Senior (1991), p. 8.
 - 26 Senior (1991), pp. 8-24.
 - 27 Chamberlain (2009), p. 122.

- 28 Chamberlain (2009), p. 125.
- 29 Chamberlain (2009), p. 120.
- 30 Benjamin (2018).
- 31 Benjamin (2021), p. 67
- 32 Benjamin (2021), p. 68.
- 33 Sato (2019), p. 27.
- 34 Sato (2019), p. 28
- 35 Sato (2019), p. 28
- 36 Benjamin (2010), p. 45.
- 37 Arnold (2008).
- 38 Benjamin (2010), p. 46.
- 39 Sato (2019), p. 29.
- 40 Chamberlain (2009), p. 155.
- 41 Chamberlain (2009), p. 156.
- 42 Arnold (2008).
- 43 Sato (2019), p. 30.
- 44 Sato (2019), p. 31.
- 45 Sato (2019), p. 30.
- 46 Sato (2019), p. 49. 言語の問題は西インド諸島から到着した子どもがイギリスの学校に通学する際によく経験する困難であった。フローエラもトリニダード・アクセントで教科書を音読し教師から叱責された際に、母から学校のルールに従うように言われたことを記憶している (Benjamin (1995/2010), pp. 99 - 101.) フローエラは、母の言葉は西インド諸島出身の子どもに対して無理解なイギリスの学校においてより良い成績をおさめて社会で有利に立つための忠告であったことと理解している。2人がパトワ/ローカル・アクセント対イギリス英語の軋轢を経験した時の年齢、母の対応などがこの経験に対する解釈の差をもたらしていると考えられる。
- 47 チャイルド・マインダー (child minder) は、公的な保育施設が極端に少なかったイギリスにおいて子どもの親との私的契約によって自宅で子どもを保育する人を指す。その存在は19世紀から知られているが1948年の法令で初めて公的に認知され、子どもを3人以上預かる場合などについては登録が必要とされた。
- 48 Sato (2019), pp. 43 - 45.
- 49 Sato (2019), p. 30.
- 50 フローエラの5人のきょうだいはそれぞれの分野で成功をおさめた。姉は国際的な製薬会社に長く勤めダイバーシティ推進に尽力する一方、社会活動を行った。三人の弟はそれぞれエンジニア、不動産業、IT技術者となった。

妹はピアノ演奏家であるとともにファイナンスアドバイザー、事業家として活躍している。(Benjamin (1995/2010), p. 121.)

51 Mallet (2002).

52 移民する人の感情についてはペラルディ (2021) pp. 386 - 392 に詳しい。

参考文献

- Anim-Addo, Joan (2006), “Windrush Children and Broken Attachments”, Separation and Reunion Forum and Goldsmith College Joint Conference 22 June 2006, http://www.serefo.org.uk/wp-content/uploads/2013/06/windrush_children_and_broken_attachments~Joan_Anim-Addo.pdf: Last accessed on 14th November, 2022.
- Arnold, Elaine (2006), “Separation and Loss through Immigration of African Caribbean Women to the UK”, *Attachment and Human Development*, 8 (2), pp. 159-174.
- Benjamin, Floella (1995/2021), *Coming to England*, Trafalgar Square Book/Macmillan.
- 本稿では2021年のMacmillan Children’s Books版を利用した。
- Benjamin, Floella (2010), *The Arms of Britannia*, Walkers Books.
- Chamberlain, Mary (2009), *Family Love in the Diaspora*, New Brunswick, NJ. And London, Transaction Books.
- Coleman, David and John Salt (1992), *The British Population: Patterns, Trends, and Processes*, Oxford: Oxford University Press.
- Lewis, Jane (2001), “Marriage”, Ina Zwiniger-Bargielowska ed. *Women in Twentieth-century Britain*, Harlow, Longman, pp. 149-164.
- Mallet, Rosemarie, et al. (2002), “Social Environment, Ethnicity, and Schizophrenia: A Case-control Study”, *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 37 (7), pp. 329-335.
- Price, Robert and George Sayers Bain (1988), “The Labour Force”, A.H. Halsey ed., *British Social Trends since 1900: A Guide to the Changing Social Structure of Britain*, Basingstoke, Macmillan, pp. 162-201.
- Sato, Kiyotaka (2019), *The Life Story of Dr Dorothy Frances, MBE, An African-Caribbean Business Woman in Leicester*, Research Centre for the History of Religious and Cultural Diversity, Meiji University, Tokyo.
- Senior, Olive (1991), *Working Miracles: Women’s Lives in the English-Speaking Caribbean*, London and Bloomington, IN., James Curry and Indian University Press.

- Snow, Stephanie and Emma Jones (2011), “Immigration and the National Health Service: Putting. History to the Forefront” *History and Policy*,
<https://www.historyandpolicy.org/policy-papers/papers/immigration-and-the-national-health-service-putting-history-to-the-forefront>, last accessed 25th April 2023.
- Summerfield, Penny (2019), *Histories of the Self: Personal Narratives and Historical Practice*, Routledge.
- Tinker, Penny, Stephanie Spencer and Claire Langhamer eds (2018), *Women in Fifties Britain: A New Look*, Routledge.
- Webster, Wendy (1998), *Imaging Home: Gender, ‘Race’ and National Identity, 1945-64*, UCL Press.

日本語文献

- 板倉孝枝 (2011) 「英国の疎開ホステルにおけるソーシャルワーク実践に関する研究－オックスフォードシャーの疎開ホステルでの思考実践に焦点を当てて」『子ども家庭福祉学』10号、pp. 69－80。
- 板倉孝枝 (2019) 「英国の親子分離に関する研究－ハムステッド入所型戦時保育施設の実践を通して」『ハルシオン (世界子ども学研究会紀要)』7号、pp. 49－58。
- 中野明德 (2017) 「ジョン・ボウルビイの愛着理論—その生成過程と現代的意義」『別府大学大学院紀要』、19号、pp. 49－67。
- 浜井祐三子 (2011/2023)、「近現代のイギリスと移民」、木畑洋一・秋田茂編著『近代イギリスの歴史』第4版、ミネルヴァ書房、pp. 257－276。
- ペラルデイ、ミシェル著 (有田英世訳) 「壁と涙－難民、国外亡命者、移民」ジャン＝ジャック・クルティエヌ編 小倉孝誠訳 (2021)、『感情の歴史 Ⅲ 19世紀末から現代まで』、藤原書店、pp. 385－408。
- 眞嶋史叙 (2009)、「『豊かな社会』への道程—1953－54年英国家計調査データの分析から」『学習院大学経済経営研究所年報』23巻。

Summary

After Your Mother Left for Britain: The Afro-Caribbean Children and Their Family Reunion

Nobuko Okuda

Britain in the 1950s saw the permeation of the so-called Victorian family ideal to every corner of society. More people were getting married young than in the pre-War days. Better economic situations meant stable jobs for husbands and better wages. Working-class wives could now stay at home doing household work and rearing children. On the other hand, the British economy was suffering from severe labour shortages in some essential industries and services, such as mining, cotton, transport, and domestic work. Men and women of the Caribbean islands emigrated to Britain to fill these shortages. Women left their children behind with their grandmothers or other people. This arrangement was called ‘child-shifting.’ Those children were sent for later when their mothers saved enough for the travelling fares. Sometimes, this took 10-15 years, or even longer.

Based on the personal narratives of two women (Floella Benjamin from Trinidad and Dorothy Francis from Jamaica) who had been left behind, we see how they see their childhood lives and family reunions. Floella, who was left in Trinidad with unkind godparents for 15 months, tells a happy reunion story, in which both the mother and children rejoiced to reunite. Dorothy, on the other hand, who had been left with her maternal grandmother in Jamaica at the age of one, and had happy childhood memories with her loving grandmother. Dorothy’s narratives of her family reunion were full of sorrow and confusion. She could recognise neither of her parents, the fact she had younger sisters and brothers made her feel

isolated.

Family reunion and immigration to Britain meant Dorothy had to start a new life with strangers in an unfamiliar and hostile environment. She and her parents never constituted strong emotional ties even after Dorothy grew up.

Interviews with Afro-Caribbean immigrants in Britain who had been left behind after the emigration of their mothers show broken ties with their mothers and emotional confusion on both sides, which family reunion could not convalesce.

The Victorian family ideal was never a reality in the Caribbean Islands. They had different family forms and emotional ties within the family. Their migration history presents a different perspective on British family history.